平安京右京

http://www.kyoto-arc.or.jp
(財) 京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

右京の遺跡の典型　右京三条三坊五町（中京区西ノ京桑原町）

建物の柱跡が、東西および南北方向に等間隔で並ぶ。右京域の調査では、後の時代に壊されることなく平安時代前期の建物跡などが検出できることが多い（西から）。

平安京をはじめとする古代の都城は、東西南北に走る大小の道路によって多数の街区に画されていた。こうした大路小路のなかで最大の道路は、京の玄関ともいうべき羅城門（らじょうもん）と宮の正門（朱雀門（すざくもん））を南北に結ぶ朱雀大路である。この朱雀大路を中心に東西に分割された地域の西側が右京、東側が左京とよばれていた。現在の道路でいえば、一条・九条・千本・天神川の各通りに囲まれた範囲から、平安宮の西半分（御前通より東、二条通より北）をのぞいた地域が平安京の右京に該当する。

平安京造営にあたっての設計理念は、平面的にはこの右京とそれに対する左京が対称的に配置されたものであったが、実際の姿はどのようなものだったのだろう。

京都盆地の地勢はおおむね北東部から南西へ向かって低くなっており平安京の範囲だけを見ても実際に約 40 m の標高差を示している。このため左京にくらべて右京、特にその南部は低湿な土地条件になっており、発掘調査でも河川や湿地の跡が多く確認されている。これらの川や湿地には平安京の造営に際して流路が整備、管理されたり、埋めて整地されたりしたものもあるが、遷都（せんと）後もそのまま放置されていたところも多くあり、邸宅の建物配置や条坊街路の敷設に影響を及ぼしている。またそれらを整地して造営が行なわれたと

ころでも、もともと低湿な土地なので大雨による河川の氾濫はたびたびあったのだろう。

このような悪条件をもった右京の宅地はつぎつぎに放棄され、やがて平安京は左京を中心とする町並みへと変化していく。10世紀後半に慶滋保胤によって著された『池亭記』には、右京が人家も稀になり幽虚のようになったこと、それに対して左京には多くの人が住み、賑わっている様子が描写されている。現に右京域の発掘調査で検出される遺構には、9・10世紀に属する平安時代前半期のものが圧倒的に多く、平安時代後半期以降のものは、自然堤防などの微高地上に立地した遺跡のほかは非常に少ない。このような平安時代前期の遺跡のなかには、造営からわずか数十年程度で廃絶したものもあり、保胤が描写した右京の衰退がところによっては思いのほか早く始まっていたことがうかがえる。そうした地域の大部分はその後宅地としてはほとんど利用されず、低湿地のまま放置されるか、耕作地として再利用されていく。

京の造営（北から）　右京八条二坊二町（下京区西七条石井町・七条小学校）
ここでは湿地を埋めて、宅地や道路（西靱負小路）などがつくられている。

このようにみると都市としての平安京は、当初の造営計画がそのまま施工されたものではなかったようである。しかし、これが逆に遷都以来人々の生活が連続し、各時代の遺跡が複雑に重なっている左京域よりも、右京域に平安時代前期の遺構を良好な状態で残す結果を生んだといえるだろう。

これまでに実施された右京域の調査では、大小の邸宅や条坊街路など前半期の平安京に関わる重要な遺跡が数多く発見されている。左京の調査でみることのできる平安京以降の歴史を縦に累積させた遺跡の在り方に対して、右京はその地中に、都市としての京都の出発点ともいうべき平安京の原像を残す地域といえるだろう。

（平尾政幸）

宅地を流れる自然流路（北東から）　右京六条一坊十四町（下京区中堂寺栗田町）
右京の南部では、造営後も堀川など管理された川以外に自然流路がいくつも流れていた。